

Title	サイイドの特権を保証する権威とは何か： 1931年にバタヴィアで出版された『真実の説明』を手がかりに
Sub Title	What certify the privilege of the sayyids? : an analysis of "Haqa'iq or a true explanation" published in Batavia in 1931
Author	新井, 和広(Arai, Kazuhiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.35 (2020. ) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# サイイドの特権を保証する権威とは何か

——1931年にバタヴィアで出版された『真実の説明』を  
手がかりに——

新井和広<sup>(1)</sup>

## はじめに

20世紀前半の蘭領東インド、特に1910年代から30年代半ばにかけてはアラブ・コミュニティの近代化をめぐる主に2つのグループ、サイイド（預言者ムハンマドの子孫）とイルシャード（イスラーム改革団体、後述）が激しい論争を行っていた。彼ら自身の主張はアラブ系が発行していた定期刊行物や、アラブ系団体が発行したパンフレットを通して社会に発信されていた。

本稿ではその論争の中でサイイド側によって英語で出版された『真実の説明』と題されたパンフレットの内容を紹介しながら、彼らがどのような根拠に基づいて自らの立場を主張していたのか、この史料で引き合いに出された文献にはどのような特徴があったのかを考察する。それによって、当時のサイイドが置かれていた状況の一面を明らかにしたい。

---

(1) 本稿は科学研究費補助金「ムハンマド一族をめぐる諸言説に関する研究：イスラーム史研究の革新をめざして（基盤研究B）」の成果の一部である。また本稿の内容の一部は2019年7月6日に開催された研究会で当該史料の読み合わせ・検討を行った際の議論に基づいている。研究会において有益なコメントをいただいた森本一夫、吉田京子、杉山隆一、中西竜也各氏に感謝したい。

## 時代的な背景：サイドとイルシャードの論争

1900年代から30年代にかけて、蘭領東インドのアラブ・コミュニティではサイド（預言者ムハンマドの子孫）の「特権」をめぐる論争が起っていた。この「特権」はイスラームの歴史の中でしばしば国家によって与えられてきた免税や福利ではなく、慣習とイスラーム法の境目が曖昧な規定として存在していた。特に激しい議論を巻き起こしたテーマは、1. 婚姻において男性と女性の対等性（カファーア kafa'a）を考える際に血統も重視すべきか<sup>2)</sup>、2. サイドに挨拶する時に尊敬のしるしとして手の甲に口づけすること（タクビール taqbil）は義務か、3. 「サイド」という称号（ラカブ laqab）を使用することができるのは預言者の子孫だけか、の3つである。このうち1930年代に議論的になったのがサイド称号問題であり、称号の独占に反対する一部の非サイドが自らの名前に「サイド」と付けだしたり、他の人々にもそれを勧めたりしたことからアラブ・コミュニティ内で対立が激化した。

サイド批判の主体は「イルシャード（アラビア語で「導き」）」と呼ばれる改革団体であった。正式名称は「改革と導きのためのアラブ団体（Jam'iyyat al-Islah wa-al-Irshad al-'Arabiyya）」であり、1914年にアラブ改革団体「慈善団体（Jam'iyyat Khayr）」から有志のメンバーが分裂する形で設立された。「慈善団体」が分裂した理由は、サイドと非サイドが上記の問題をめぐる対立したからである。その後、1930年代半ばまではサイドとイルシャードの間で論争が続き、時には暴力事件に発展することもあった。ここでサイドとイルシャードの対立と書いたが、サイド

---

(2) この文脈では、サイドの女性が結婚できるのは血統が対等であるサイドの男性だけであるという決まりの是非が問題となっている。女性とは対照的に、サイドの男性であれば結婚相手の女性の血統は問われない。カファーアにおいて考慮の対象となるのは血筋だけではなく、社会階層、財産、職（この場合は夫と義理の父親の職が検討の対象となる）などが挙げられる。カファーア一般についてはEI2, "Kafa'a" 参照。

ドは血縁集団であり、イルシャードは団体である。イルシャードのメンバーや同調者はイルシャーディーと呼ばれる。サイイドたちも1927年に自らを代表する団体、「アラウィー連盟 (al-Rabita al-'Alawiyya)」<sup>(3)</sup>をバタヴィアで設立し、最初の4年間はこの団体独自の雑誌を刊行していた。

この論争の影響は単に蘭領東インドのアラブ・コミュニティ内にとどまらず、アラブ以外のムスリム、東南アジア内の他地域に住んでいるアラブ系、彼らの祖国ハドラマウト（南アラビアの一地方）の人々、中東の思想家の一部も関心を寄せていた。また蘭領東インド政府や、ハドラマウトの王国を保護国化していた英国も、主に治安の観点から論争に注目していた。

このように、コミュニティの枠を超えて注目された問題ではあったが、実際に論争に関わっていたのはアラブ系である。蘭領東インドに移住してきたアラブの大多数（90%以上と言われる）は南アラビアのハドラマウト地方（現イエメン共和国東部）出身者なので、批判の対象となったサイイドも、イルシャードのメンバーの多くもハドラマウトからの移住者か、その子孫である。従来の研究ではこの対立は保守派对改革派の争い、またはコミュニティ内の主導権争いだと考えられてきた。しかし1990年代以降研究が進み、現在ではそれぞれ改革を目指す集団が、改革の進め方や思想をめぐって対立していたと考えられるようになった。

もうひとつ重要な背景として言及しておかなければならないのは、移民の世代間における認識の違いである。ハドラマウトから東南アジアへの移民は19世紀後半から特に盛んになったが、1930年代にはアラブ・コミュニティの中で現地生まれ（東南アジア生まれ）の人々の存在が大きくなっていった。これはアラビア語よりもインドネシア語に堪能で、「祖国」ハドラマウトで生活した経験を持たない人びとの増加を意味する。この時期には

---

(3) 蘭領東インド、さらに東南アジア在住サイイドの多くは、彼らの共通の祖先であるアラウィーの名を取って、「アラウィー・サイイド」「バー・アラウィー」とも呼ばれている。アラウィー連盟という名称はそこから来ている。本稿では彼らを「アラウィー」ではなく「サイイド」と呼ぶ。

ハドラマウトの歴史の中でサイドが果たした役割をことさら否定的に見る言説がイルシャードの人々の中から現れるが、これは彼らがハドラマウト社会の複雑な状況を知らず、インドネシアにおける対立の構造をハドラマウトの歴史に投影した結果であろう。サイドという称号についても、イルシャードの第一世代の指導者たちはサイドと非サイドを称号で分けていたようである<sup>(4)</sup>。1930年代に入ってサイド称号問題が大きくクローズアップされた理由のひとつは、ハドラマウトの慣習を重視しない、または肌感覚で知らない世代がイルシャードで指導的な役割を果たすことになったからだと考えられる。

さて、この時期はサイドもイルシャードも定期刊行物のほかにパンフレットを発行し、自らの主張を社会に発信していた。そのうちサイド側、より正確にはアラウィー連盟が発行したパンフレットのひとつが本稿で紹介する『真実の説明』である<sup>(5)</sup>。

### 史料の概要と入手経緯

『真実の説明』の概要は以下の通りである。

タイトル：Haqa'iq or A True Explanation: Distributed to the Public for a Record in History (真実についての説明：歴史を記録するために人々に配布されたもの)

出版者、出版場所：Lujnatoen Nashir Watta'lief of Arrabbitatoel 'Alaiyah, Batavia (アラウィー連盟、編集出版委員会、バ

(4) Mobini-Kesheh 1999, p. 104.

(5) この時期にサイド側、イルシャード側から出版されたパンフレットは複数存在する。Mobini-Kesheh 1999, p. 105, f.n. 82にはそのうち4つのパンフレットのタイトルが書かれている。Mobini-Keshehはサイド、イルシャード双方がマレー語やアラビア語でパンフレットを出版したと書いているが、本稿で紹介する通り英語版も存在している。彼女がインドネシアでの調査中に英語版のパンフレットを入手していなかったとしたら、その理由のひとつは情報提供者が主にイルシャード側の人々だったからであろう。

タヴィア<sup>(6)</sup>

出版年：1931年<sup>(7)</sup>

全28ページ，25cm？<sup>(8)</sup>

本稿で紹介するものは英語版だが、この史料は複数の言語で出版されており、インドネシア語版はシンガポール国立図書館に所蔵されているほか、Mobini-Kesheh による先行研究でも引用されている<sup>(9)</sup>。所蔵館の書誌情報によると全41ページであり、英語版よりページ数が多い。アラビア語版はライデン大学図書館に所蔵されており、当該図書館の書誌情報によると全63ページである<sup>(10)</sup>。インドネシア語版、アラビア語版とも筆者は未見である。またオランダ語版の存在を示している研究もあるが、筆者は確認できていない<sup>(11)</sup>。

英語版は筆者のもとにコピーがあるが、管見の限りどの図書館にも所蔵されていない。全体として英語の表現が不自然で、文法的なミスも散見される。先行研究での引用を見ると、インドネシア語版には英語版で出てこない用語が使用されていることが分かる<sup>(12)</sup>。また、蘭領東インドのアラブ

(6) 最終ページには、ボゴール Bogor で印刷されたことが記されている。

(7) 出版年は記されていないが、内容から判断して1931年に出版されたことは確実である。

(8) 後述の通り、筆者が渡されたのはコピーであり、原本のサイズは不明である。

(9) Mobini-Kesheh 1999, p. 162ほか。シンガポール国立図書館のデータによるとインドネシア語版のタイトルは *Haqa'iq atau keterangan yang benar: disiarkan bagi oemoem oentoek pengisi tarich* である。Mobini-Kesheh 1999ではタイトルを *Haqa'iq atau keterangan yang benar* と、インドネシア語の新表記に改めている。

(10) アラビア語版のタイトルは、*Haqa'iq nanshuruha li-l-'ulum wa-nusajjiluha li-tarikh* である。

(11) Ho 2006, p. 280. 原文では“pamphlets translated into English, Dutch, Arabic, and Malay (Lujnatoen Nashir Watta'lief 1931)”となっているが、パンフレットが複数形であることや、前後の文脈から判断するとオランダ語に翻訳されたのは本稿で紹介するパンフレットと別のものである可能性もある。

(12) たとえば Mobini-Kesheh 1999, p. 106における記述には、インドネシア語版で *halal*, *haram* という語が現れるが、英語版にはそれらの語は使用されてい

系が議論したり著作物を出版したりする際に使用していたのはアラビア語やインドネシア語（マレー語）であることから考えて、おそらくこのパンフレットもインドネシア語版、またはアラビア語版が原本で、英語版はその翻訳であろう。

それでは英語版にはどのような価値があるのだろうか。それは内容の精緻さはともかく、英語で出版されたという点そのものにある。上述の通り、この論争に関する一次史料の多くはアラビア語とインドネシア語で書かれており、英語で書かれた史料は大英図書館に所蔵されているアデン保護領関係文書など、当事者以外が書いた報告が多い<sup>13)</sup>。つまり、『真実の説明』は論争の当事者がわざわざ母語ではない英語を使って発信した貴重な史料だと言える。

筆者のもとにあるコピーは個人から贈呈されたものである。個人的に入手した史料の性質は、経緯も含めて評価することが重要であると考えてるので、入手時の状況をここに記しておきたい。筆者が本史料を手に入れたのは2000年11月29日のことで、ジャカルタのタナ・アバン（Tanah Abang）地区にあるアラブ系経営の孤児院、ダールル・アイタム（Daarul Aitam）で、責任者のアリー・アブー・バクル・シハープ（Ali Abubakar Shahab）氏から贈呈された。出版から70年近く経っていたこともあり、受け取ったのは原本ではなくコピーである。筆者がアリー・シハープ氏と会うのはこの時が初めてであったが、先方は筆者のことをアラブ系の歴史を調査している日本人として人づてに聞いて知っていた。この時筆者はジャカルタを訪れていた中東研究者の白杵陽氏をアラブ関連の施設や場所に案内していて、他のアラブ系団体を訪れている時にこの孤児院も訪れるよう促された。アリー・シハープ氏は日本からの研究者二名に「本当の歴史

---

ない。

(13) アデン保護領関係文書には、東南アジアやハドラマウト在住のアラブから英国に宛てた書簡も含まれている。書簡の多くはアラビア語で書かれているが、通常英訳が付されている。

を知ってほしい」という趣旨のことを述べた後、それぞれにコピーを渡した。私の訪問は突然だったが、受け取ったコピーは簡易製本がされていたため、おそらく氏は施設への訪問者にこのパンフレットを渡すために、予めコピーを用意していたのだろうと推測される。後述の通り、この史料はアラブ・コミュニティが二つに分かれて激しい議論を展開していた時期に、サイド側の主張を広めるために印刷されたものであり、サイドであるアリー・シハーブ氏が「真実の歴史」として外国人の歴史研究者にこの冊子を渡したことはこの史料の意味を象徴する出来事だと言える<sup>14)</sup>。

### 先行研究での扱い

20世紀前半における東南アジアのアラブ・コミュニティに関連する研究の多くがサイドとイルシャードの対立・論争<sup>15)</sup>を扱っていることから、この史料は複数の研究で参照されてきた。具体的には Mobini-Kesheh はインドネシア語版を、Boxberger はアラビア語版を、Ho は英語版を利用している<sup>16)</sup>。

3名の中で最も広範に『真実の説明』を参照しているのは Mobini-Kesheh である。たとえばサイドたちはイルシャードに対する批判の中で、イルシャードが自らをハドラマウトのアラブから切り離してしまったと批判したことや、サイドが上述のタクビールを義務だとする主張を実質的に諦めたことなど、史料の本題ではないがサイドたちの認識を示す

14) この訪問の時に使用した言語は英語である。アリー・シハーブ氏は母語としてのインドネシア語のほか、英語も話せる。また賠償留学生として日本の東京電機大学で学んだこともあるため日本語もまだ憶えているが、複雑な話をするのは困難である。一方、アラビア語は片言しか話せないため、3人の共通言語は自然と英語になった。

15) この論争は研究書では「アラウィー・イルシャーディー論争（‘Alawi-Irshadi dispute）」と呼ばれることが多い。本稿では紹介する史料における記述に基づき、アラウィーではなくサイドという語を用いる。

16) Mobini-Kesheh 1999, pp. 93, 99, 105-106; Boxberger 2002, p. 58; Ho 2006, pp. 279-80.



記述を丁寧に拾っている。

一方、本史料の内容で3名が共通して取り上げているのはサイド称号問題で、サイドたちが様々な文献や慣習を挙げながらサイドという称号が預言者の子孫だけに使われてきたと述べている。後述の通り、そこにはクルアーンやハディースのように啓示に関わるもの、イスラーム諸学の古典、近代のムスリム改革主義者の著作も含まれているが、3名がことさら関心を寄せているのはイスラームとは直接関係ない文献も根拠として使われている点である。たとえば Mobini-Kesheh は『真実の説明』と他の史料を参照しながら、サイドたちがハドラマウトにおける日常会話、ハドラマウトと蘭領東インドの公的な書類、アラビア語とマレー語の辞書、西洋のイスラーム研究者を根拠として、サイドという称号の慣習的な使用法を裏付けようとしていた、と書いている<sup>(17)</sup>。それに加えて Ho はブリタニカ百科事典など、英国とオランダの参照文献もサイドの主張の根拠になっていることを挙げ、Boxberger は著作が引用されている西洋の研究者を「西洋のオリエンタリスト (Western Orientalists)」と表現して、この史料の特徴を際立たせている<sup>(18)</sup>。

いずれにしても、サイドという称号を誰に使えるのかというイスラーム法と慣習が混ざった問題に関する議論で、西洋の研究者や出版物を主張の根拠としていることに関心が寄せられていることが分かる。本稿でもこの点について上記の研究よりも少し詳しく検討してみたい。

この時代を扱っている他の主要な研究は、山口元樹の『インドネシアのイスラーム改革主義運動』<sup>(19)</sup>と Ulrike Freitag の大著『インド洋移民とハド

(17) Mobini-Kesheh 1999, p. 105. 当該部分で列举されている根拠の中にはアズハル大学のシャイフ、クアイティー王国スルターン、イエメンのイマーム・ヤフヤーの意見もあるが、『真実の説明』英語版には見当たらない。これは同ページ脚注84で示されているスヌック・フルフローニェの報告書から来ている情報だからだと考えられる。

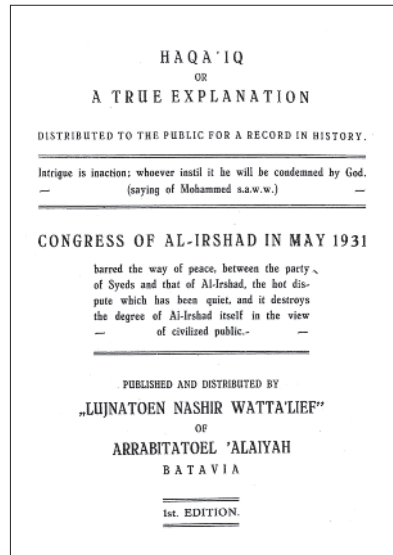
(18) Ho 2006, pp. 279-80, Boxberger 2002, p. 58.

(19) 山口 2018.

ラマウトの国家形成——祖国の改革』<sup>20)</sup>である。このうち山口の研究は本稿で紹介する史料に言及しながら、サイドがタクビールの慣習に否定的な見解を示したことを述べているが、情報源は先行研究であり、本史料を直接参照しているわけではない<sup>21)</sup>。Freitagの研究では本史料への言及は見当たらず、サイド称号問題についての議論で主に使用されているのは英国が作成したアデン保護領関係文書である<sup>22)</sup>。

### 『真実の説明』の内容

本稿で紹介する史料『真実の説明』は1931年5月以降に発行された。最初のページにはタイトルのほかに「陰謀を企てる者は全て後に神から非難される」という主旨のハディースの引用が付されている。また1931年5月に開催されたイルシャードの大会がサイドとイルシャード間の平和を妨げ、沈静化していた論争 [を再燃させ]、教養のある人々の前でイルシャードの地位を貶める、という主旨の文言が入っている。この点から考



『真実の説明』最初のページ

<sup>20)</sup> Freitag 2003.

<sup>21)</sup> 山口, 2018, p. 81, 本文と脚注62. もっとも山口の研究の価値は, Mobini-Kesheh も本格的には使用しなかった史料, 特にアラビア語史料を用いてサイド称号問題他, サイド・イルシャードの論争を議論し, Mobini-Kesheh の研究を乗り越えたところにある。

<sup>22)</sup> Freitag 2003, pp. 255-8. 特にサイド称号問題に関する同時代の情報は 大英図書館・インディア・オフィスのアデン保護領関係文書, R/20/A/3413 “Use of the title ‘Seyyid’ in official documents” から得ている。

えても論争を目的として発行されたパンフレットであることが分かる。またページの下部には「1st edition」と書かれている。実際に第2版以降が出版されたかどうか筆者は知らないが、少なくとも内容の改定を考えたことを示している。

本文の内容は以下の3つに集約される。

1. 1931年5月10日に開催されたイルシャードの大会で、スラバヤのイルシャード（支部）の長、ウマル・フバイス（Umar Hubeis）が行った講演の内容に対する批判
2. イルシャードの大会で、「サイド」という称号を預言者の子孫に限定して用いることを止め、一般的な男性の敬称とする決定がなされたことに対する反論
3. イルシャードが今までサイドにとってきた態度やイルシャードの長、アフマド・スールカティー（Ahmad al-Surkati）に対する批判

このパンフレットが出版されることになった直接の原因は、上記イルシャード大会で行われたウマル・フバイスの演説と、サイドという称号に関する決定である。サイドたちによれば、彼らは以前からイルシャード側からの攻撃に耐え続けてきた。しかしウマル・フバイスの演説が行われたイルシャード大会は公開の場で開催され、本来論争とは関係ない人々を巻き込む結果になった。結果としてサイド側も何らかの反論をしなければならず、仕方なくパンフレットの発行に至ったとのことである。サイドたちは、パンフレットを出版する目的は真実を述べることだけであり（p. 3）、彼らの血統を維持し、歴史とイスラームで聖なるものとされていることを守ることで、決して自分たちが上に立とうとしているわけではないと述べている（p. 27）。

ウマル・フバイスはスラバヤのイルシャードの長（secretary）で、当地におけるイルシャード学校の校長でもある。彼の演説はイルシャードの歴史を概観するものであったが、サイドをことさら貶める内容で、今ま

でサイイドが行ってきた良いことには全く触れず、イルシャード以外の出席者は違和感を覚える内容だったという。また招待されたインドネシア人、華人の指導者や報道関係者は、インドネシアの民族運動に対するイルシャードの立場についてアブドゥッラー・バージュライ (Abdullah Bajerei) が行う講演を期待して大会に出席したのに、その講演はキャンセルされてしまったとのことである (pp. 4-5)。サイイドたちはウマル・フバイスの講演を直接批判するのに加え、イルシャードの長でありながらウマル・フバイスの演説を止めることなく沈黙していたとして、スールカティーにも批判を加えている (pp. 8-9, 25)。さらにイルシャードの学校ではサイイドに対する反感を育てていることを、実際に生徒が書いた文章を引用しながら指摘している (p. 6)。

いずれにしても1と3に関する部分では個人攻撃ともとれる感情的な表現が見られる<sup>23</sup>。一方、2のサイイド称号問題については典拠を挙げながら入念な反論を試みている。この点に関しては次節で検討する。

全体的に一般向けに書かれている文書であるため精緻な議論が行われているわけではない。また、上述の通り本稿で取り上げる英語版はインドネシア語版やアラビア語版に比べると議論がより簡素になっている可能性が高い。しかし、英語版で出版した、またはしなければならなかったという事情も含めて考えると、この時期サイイドたちが置かれていた状況が分かり、興味深い。本史料の価値は、サイイドの中で一定水準の知識・教養がある層が自らの立場についてアラブ・コミュニティを超えた範囲に何らかの主張をする場合、どのような権威を引き合いに出すのかが分かるという点である。

### サイイド称号問題に関する議論

上述のイルシャード大会で決定され、後に具体的な議論となったのは、

---

<sup>23</sup> たとえばp. 7ではウマル・フバイスに向けて「お前は嘘つきだ! (You are a liar!)」と述べている。

サイドという称号は誰のものかという点である。蘭領東インドでは「サイド」という称号の使用は預言者の子孫によって独占されてきた。しかしイルシャードによると本来「サイド」という言葉は尊敬に値する人物に付ける敬称で、英語ではミスター、マレー語ではトゥアン (Tuan) に等しく、サイドか否かに関わらず、誰にでも使用できる。そして1931年の大会ではこの見解を採択し、出席していたインドネシア人、華人、インド人指導者や報道陣、さらには蘭領東インドの人々など、論争に直接関係してこなかった層に対して、サイドという称号の使用を預言者の子孫だけに限定することを止めるよう呼びかけた (p. 23)。

これに対してサイドは、様々な根拠を挙げてイルシャード側に反論している。まずはサイドたちが称号問題を論ずる時に引用・言及した文献をリストアップする<sup>24)</sup>。(括弧内は本文献で言及されているページ)。

1. 『Siang Po (商報)』：蘭領東インドのインドネシア語新聞 (pp. 10-11)
2. 『Boro Budur (ボロブドゥール)』：蘭領東インドのアラビア語新聞<sup>25)</sup> (p. 11)
3. シリアとエジプトの新聞<sup>26)</sup> (p. 13)
4. ラシード・リダー (Muhammad Rashid Rida, 1865-1935)<sup>27)</sup>が『マ

<sup>24)</sup> 史料中ではハドラマウトや東南アジアの慣習にも言及されているが、本稿では文献が示されているもの以外は割愛する。

<sup>25)</sup> 編集はチュニジア人のムハンマド・ハーシミー (Muhammad al-Hashimi)。引用部分では、ハドラマウトでは「シャイフ (蘭領東インドにおけるサイド以外のアラブ系に付けられていた称号)」という語を非サイドに用いているわけではないと述べている。

<sup>26)</sup> 新聞の名前は明示されていない。新聞の中でサイドという称号を一般の人々にも使っているのは Nasibi, Yazidi をからかうためだとここでは述べられているが、この情報は『マナール』(後述)にリダーが書いた記事を元に行っている可能性がある。

<sup>27)</sup> イスラーム改革思想家、現レバノン出身のサイド。カイロで雑誌『マナール』を刊行し、改革主義思想をイスラーム世界各地に広めた。アフガーニー

- ナール (al-Manar, 灯台)』に書いた記事 (p. 15)
5. クルアーン (p. 16)
  6. ハディース (pp. 16, 23)
  7. シャキーブ・アルスラーン (Shakib Arslan, 1869-1946)<sup>28</sup>著『イスラーム世界の現在 (Hadir al-'Alam al-Islami)』中で下記ゴルトツィーハーの著作を引用した部分 (pp. 15-6)
  8. ゴルトツィーハー (Ignacz Goldziher, 1850-1921) がフランス語の『イスラーム百科事典 (Encyclopaedie Islamiah)』で、アフガーニー<sup>29</sup>について述べた部分 (pp. 15-6)
  9. ハドラマウトとその他の地における人頭税の書類 (Poll-tax form), パスポートなど公的な文書 (p. 17)
  10. 蘭領東インドの公的な文書 (p. 17)
  11. 蘭領東インドにおけるアラブ・カピタン<sup>30</sup>が保持している文書 (p. 17)
  12. イブン・ハジャル・ハイタミー (Ibn Hajar al-Haytami, d.1566/7)<sup>31</sup>著『必要とする者への贈り物 (Tuhfat al-Muhtaj bi-Sharh al-Minhaj)』 (p. 19)
  13. アブドゥル・ハミード・ダゲスターニー ('Abd al-Hamid al-Daghestani, d. 1883/4)<sup>32</sup>が上記のハイタミーの著作に付けた注釈

---

(後述) の孫弟子でもある。

28) レバノン出身の活動家, 思想家。イスラーム世界の統合を目指して多数の著作を記したほか, 反植民主義の活動を行った。アラブの中でも著名な人物であるが, 属している宗派はドゥルーズ派であり, スンナ派ムスリムからは異端視されることもある。

29) Jamal al-Din al-Afghani (1838/9-1897)。イスラーム改革, 反帝国主義, ムスリムの連帯を訴えた思想家。

30) 蘭領東インド各地のアラブ・コミュニティの長のタイトル。

31) エジプトのシャーフィイー派の学者, 著述家。

32) ダゲスターン出身で, マッカに居を定めた宗教者・学者。Snouck Hurgronje 2007, p. 202.

- (p. 19)
14. シヤムスッディーン・ラムリー (Shams al-Din al-Ramli, d.1595)<sup>(33)</sup>  
著『必要とする者の終わり (Nihayat al-Muhtaj ila Sharh al-Minhaj)』 (p. 19)
  15. ファン・デン・ベルク (L.W.C. van den Berg, 1845-1927) 著  
『ハド라마ウトとインド島嶼部におけるアラブ居留地 (Le Hadhramout et les colonies arabes de l'archipel indien) (1886年)』 (p. 20)
  16. ヒルシュ (Leo Hirsch) 著『南アラビア, マフラ, ハド라마ウトの旅 (Reisen in Süd-Arabien, Mahra-Land und Hadramut) (1897年)』 (p. 20)
  17. 『マレー語・オランダ語辞書 (Maleish-Neederlandsch Woordenboek)』 (p. 20)
  18. 『アラビア語・マレー語辞書 (dictionary called "Arab - Melajoe" by Messrs. Haji Muhammad Fadhloellah and B. Th. Brongeeest)』 (pp. 20-1)
  19. 『ブリタニカ百科事典 (Encyclopaedia Britannica)』 (pp. 11, 21)
  20. 『蘭領東インド百科事典 (Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië) (1905年)』 (p. 21)
  21. スヌック・フルフローニエ (Christiaan Snouck Hurgronje, 1857-1936) 著『メッカ (Mekka) (1888-89年)』 (pp. 21-2) 『アチェ人 (De Atjehers) (1893-94年)』 (p. 22)
  22. ユインボル (Theodorus Willem Juynboll) 著『イスラーム法ガイド (Handleiding tot de kennis van de Mohammedaansche wet) (1903年)』 (p. 22)
  23. サアーリビー (Abu Mansur al-Tha'alibi, d. 1038)<sup>(34)</sup>著『言語学

---

(33) エジプトのシャーフィイー派法学者。

(34) ニーシャーブール (現イラン) 生まれのアラブ文学者。

(Fiqh al-Lugha)』 (p. 23)

いずれもサイドという称号を預言者の子孫だけに使用する慣習について述べているか、それを補強とする材料を提供している。

このうち、ハイタミー (12)、ダゲスターニー (13)、ラムリー (14)、サアーリビー (23) の著作は時代が異なるものの、イスラーム諸学や文学の伝統を継承しているものだと言える<sup>35)</sup>。このうち前の3者は東南アジアで最も支配的な地位を獲得している法学派、シャーフィイー派に属しているため、ここで引き合いに出されるのは自然である。一方スンナ派4法学派のうちシャーフィイー派以外の派、すなわちハナフィー派、マーリク派、ハンバル派、さらに同じイスラームでもシーア派の文献は引用されていない。

より興味深いのは、アラビア語の古典とされる書物や近代以降のムスリム知識人(後述)の見解に加えて、「非イスラーム」的な文献・文書や非ムスリムのイスラーム研究者の文献も引き合いに出されている点である。たとえば『Siang Po (商報)』はタイトルからも分かる通り、主に商業に関するニュースを提供する新聞で、編集者は華人である<sup>36)</sup>。

西洋の研究者や植民地官僚の中で著書が引用されているのは、ゴルトツィーハー (8) ファン・デン・ベルク (15)、ヒルシュ (16)、スヌック・フルフローニェ (21)、ユインボル (22) の5名で、全員が研究者である。そのうちファン・デン・ベルク、スヌック・フルフローニェ、ユインボルはオランダ人、つまり蘭領東インド在住アラブにとっては宗主国の人間で、

35) このうち、ハイタミーとラムリーの著作については、サイド称号問題に関してナフダトゥル・ウラマー (Nahdatul Ulama, インドネシア最大のイスラーム団体) が出したファトワーの中でも、従うべき権威ある書物として挙げられている。山口 2018, p. 142, f.n. 24.

36) もっとも Siang Po にはアラブ・コミュニティの動向に関する記事もよく掲載されていた。本史料 (pp. 4-5) によれば、ウマル・フバイスの演説についても否定的なトーンで記事にしている。



ハドラマウト、マッカの東南アジア出身者コミュニティ、シャーフィイー派法学に関する著作があるほか、前の二人は蘭領東インドの植民地政府でも役職を得ていた。ヒルシュはベルリンで教鞭をとっていたが、1893年にハドラマウトを訪れ、その報告を単著の形で出版していた。つまりこの4名は蘭領東インドのサイドと何らかの形で接点があったことになる。

唯一の例外はゴルトツィーハーである。彼はハンガリー出身のユダヤ系研究者で、スヌック・フルフローニェと並んで西洋におけるイスラーム学の創始者の一人である<sup>37)</sup>。ゴルトツィーハーが書いたイスラーム神学その他に関する著書は現在でも評価が高い。彼による記述として引用されているのは、アフガーニーがティルミズィー<sup>38)</sup>の子孫であり、ティルミズィーは預言者の孫フサインまで途切れることのない〔血統の〕リンクを持っているため、サイドという称号を持つ権利を主張している、とフランス語の『イスラーム百科事典』に書いている部分である。

しかしこの部分はシャキーブ・アルスラーンの著作『イスラーム世界の現在』からの孫引きである。アルスラーンは当時のイスラーム世界ではよく知られた思想家で、サイドもイルシャードもその権威を認めていた。また多数の著作を残した著述家としても有名で、蘭領東インドでも彼の著作はよく読まれていたと考えられる。蘭領東インドのサイドたちが、研究内容でも行政への関与でも自分たちとは直接関係ないゴルトツィーハーによる記述を見つけた理由は、アルスラーンに引用されていたからであろう。アルスラーンは『真実の説明』が出版された少し後にサイドとイルシャードの仲裁に乗り出すことになる（後述）。しかしこの時点ではアルスラーンの著作はゴルトツィーハーを孫引きするために言及されている。つまり、彼らがここで引用する必要があった権威はアルスラーンではなく、西洋のイスラーム研究者だったことになる。

37) 「ゴルトツィーハー」『岩波イスラーム辞典』。

38) Abu 'Isa al-Tirmidhi (825-92)。ハディース学者で、スンナ派で最も権威の高い6つのハディース集のうちの1つの編纂者。

このように、西洋のイスラーム研究の権威が引用され、サイドの主張を強化しているわけだが、この時期のサイドたちは西洋一般についてどのようなイメージを持っていたのだろうか。サイドやイルシャードの中にもヨーロッパ人と親交を結んでいた人々は多く、彼らの西洋観はイスラーム対キリスト教、植民地主義者対被抑圧者といった単純な対立構造に落とし込むことはできない。しかしこの時期は蘭領東インドでも民族運動が高まっていたこともあり、全体的には西洋の脅威にさらされるイスラーム世界という認識が説得力を持っていた。実際、『真実の説明』の中にも西洋の進出に対する危機感を強調する記述が見られる。たとえばイルシャードがサイドを攻撃していることを批判する際、現在は危機的な状況で、西洋はイスラームを攻撃し、ベルベルの国々にいる700万人のムスリムがフランス政府によって強制的にキリスト教に改宗させられ、8万人のアラブ・ムスリムがイタリア人によって肥沃な土地を奪われ、砂漠に追いやられていると言う。そして今はアラブ・コミュニティが内部分裂している時ではないという主旨の主張がなされている (p. 7)。

サイドたちがその文献を引用した研究者たちも、サイドをはじめとする蘭領東インド在住アラブ系や他のムスリムたちとは緊張感をともなった関係にあった。スヌック・フルフローニェはマッカ在住の東南アジア出身ムスリムのコミュニティを調査し、そこでの経験や観察をもとに上記『メッカ』を出版したが、マッカ滞在中はムスリムだと偽っていた。その後、蘭領東インドにおける原住民とアラブ関連事項のアドバイザーに任命され、植民地政府の対アラブ政策に影響力を持った時期もあった。つまりアラブ系とは何らかの緊張関係にあったはずである<sup>39</sup>。ヒルシュはハドラマウト内陸部の町で、サイドの宗教活動の中心地、タリームを訪れた際

39) 同時に彼はインドネシアのムスリムやアラブ系の有力者と親交を結んでいた。ライデン大学のスペシャル・コレクションの中にはスヌック・フルフローニェが蘭領東インドのムスリムやアラブ系から受け取った書簡が保存されている。その中には彼を「ムスリム名」アブドゥルガッファール ('Abd al-Ghaffar) で呼ぶものもある。

に、キリスト教徒の訪問を良く思わない一部のサイドから敵対心を向けられ、数時間滞在しただけで追い出されるように町を後にした経験を持っている<sup>(40)</sup>。つまりサイドたちが引用した文献は、場合によっては異教徒、植民地統治の協力者が書いたものとして非難の対象になったり、内容の信憑性が疑われたりしても不思議ではない。そのような状況の中で、彼らの著作がサイドの主張の根拠として引用されているのは倒錯であると言ってもよいだろう。

もちろん当事者たちがそれらの文献の内容を全て信頼していたわけではないだろう。サイドたちがそのような非イスラーム的な権威を引き合いに出したのは、イルシャードによってこの問題に巻き込まれてしまった外部の人々、特に非ムスリムの華人やインド人を納得させるためであろう。また公的機関、つまり蘭領東インド政府や英国政府に自分たちの「権利」を認めさせるために、西洋の権威を引き合いに出さざるを得なかったとも考えられる<sup>(41)</sup>。

サイドたちが引き合いに出している権威のうち、近代以降のムスリム思想家の意見はどのように扱われているだろうか。またサイド、イルシャードと彼らの関係はどのようなものだったのだろうか。近代以降のイスラーム改革主義者で名前が挙がっているのはリダー（4）、アルスラーン（7）、アフガーニー（8）である。どの人物も地域を超えてムスリムに影響を及ぼした思想家・活動家であり、蘭領東インド在住サイドも例外ではない。このうちアフガーニーは『真実の説明』中では本人の血統について書かれているだけであり彼の著作については触れられていない（p. 16）。

(40) Hirsch 1894, p. 205. この時、タリームのサイドで、ジャワに長期間住んだ経験を持つハサン・アラウィー・ビン・シハーブはヒルシュを暖かく迎えてくれたが、他のサイドたちが「不信仰者」を追い出さないと家を破壊すると脅したため、ヒルシュはすぐにタリームを後にした。

(41) 実際、サイドたちはこれら二つの政府から「サイド」という称号の使用権について公認を得ようとしたが、両政府とも直接的な介入を避けている。Mobini-Kesheh 1999, pp. 106-7.

アルスラーンは著作は引用されているものの、上述の通りゴルトツィーハーによる記述が孫引きされているだけである (pp. 15-6)。

リーダーについては本人の見解として、サイドという称号がほとんどのムスリムにとって預言者の子孫だけに用いられる称号であると認識されていること、第一次世界大戦中にいくつかのアラビア語新聞がサイドという称号を誰にでも付けだしたことを批判していること、そのような陰謀がNasibiやYazdi派から来ていることを述べている部分が引用されている (p. 15)<sup>(42)</sup>。リーダーは自らもサイドであり、蘭領東インド在住の「同胞」と同じ考えを持つのは自然だと思われるかもしれない。しかし、1905年に東南アジアのアラブ・コミュニティでカファアの問題が持ち上がった時、リーダーは自らが刊行していた雑誌『マナール』において東南アジアのサイドとは異なる見解を示し、論争になったという経緯がある<sup>(43)</sup>。どちらかと言えば、蘭領東インドのサイドにとってリーダーはイルシャード側の人間と見られていたようであるが<sup>(44)</sup>、称号問題に関してはサイドと同じ見解を持っていたということになる。

このパンフレットが発行されて間もなく、1932年から34年にかけて、アルスラーンとリーダーはサイドとイルシャードの仲裁に乗り出した。サイド称号問題ほか、両サイドの懸案となっている問題についてアルスラーンが出した見解は、全体としてサイドに好意的に受け取られた。しかし称号問題に関してはサイドという称号を預言者の子孫に限定すべきではないという見解を示し、サイド側はそれに対して反論している<sup>(45)</sup>。リーダーについて見れば、彼はもともとイルシャード側と親交を結んでいたこと

(42) 同時に、サイドという称号がキリスト教徒を含め、預言者の子孫以外に使われることもあることも記述されている。

(43) この論争は多くの研究で取り上げられている。Mobini-Kesheh 1999, p. 53; Boxberger 2002, p. 55; Freitag 2003, pp. 245-6; Ho 2006, pp. 174-7; 山口 2018, pp. 78-9.

(44) 山口 2018, p. 149.

(45) *ibid.*, pp. 156, 158-9.

から当初サイド側は彼による仲裁には消極的だった。しかし、サイドの側からリダーへの仲裁を求め、それに応じてリダーが示した見解はサイドという称号を預言者の子孫だけに限定することを（イスラームではなく）慣習的な権利として認めるものであった<sup>(46)</sup>。この点については『真実の説明』でサイドたちが引用した彼の書き物と同じ見解が示されていると言える<sup>(47)</sup>。結果としてサイド側はアルスラーンとリダーの見解を受け入れ、イルシャード側は両者を正面から批判しなかったものの、実質的に提案を受け入れることはなかった<sup>(48)</sup>。ここで興味深いのは、リダーはイルシャード寄りと見られていたにもかかわらず、サイド称号問題に関しては蘭領東インドのサイドとほぼ同じ意見だったことである。同じサイドとは言ってもイスラーム世界各地に居住しており、出自、文化的背景、時代、思想、個人的信条などによってそれぞれ異なる判断を下す可能性があったことが分かる。

### おわりに

『真実の説明』は20世紀前半の蘭領東インドに住んでいたサイドたちの状況を伝えてくれる貴重な史料だと言える。このパンフレットの中で彼らが依拠した文献は、伝統的なイスラーム諸学に基づいたものや、ムスリムの改革主義者の著作だけではなく、百科事典、西洋のイスラーム学者に

(46) *ibid.*, pp. 149-51.

(47) 山口はリダーの仲裁を求めたのがサイド（アラウィー）の側だったことに意外な印象を受けている（*ibid.*, pp. 149-50）。しかし、『真実の説明』を見る限りサイド称号問題に関してはリダーがサイドの主張に沿った見解を持っていたことを、蘭領東インドのサイドたちは知っていたことになる。だとすれば、最終的にリダーに仲裁を求めたのは、称号問題についてはサイドたちに「勝算」があると見込んだからではないだろうか。もっともサイドは『真実の説明』が発行された後もしばらくはリダーの仲裁を拒んでいたし（*ibid.*, p. 149, fn. 44）、リダーに仲裁を求めたのはシンガポール在住のサイドなので、この点はまだ仮説の域を出ない。サイドの中でも誰が何を言っていたのかを精査する必要があるだろう。

(48) *ibid.*, pp. 152-3, 161.

よる研究など、「非イスラーム的」文献も含んでいた。また選択した文献の著者たちが常にサイイドの側に立っていたわけでもなかったことは、リダーの例から分かる。『真実の説明』で挙げられている文献は、サイイド称号問題だけに限った場合のサイイドの「味方」になってくれるものだったと言えるだろう。

サイイドが主張の根拠として選択的に引き合いに出した文献を見ると、図らずも、当時のサイイドたちが何を権威と考えていたのか、より正確には何をムスリム以外の人々を説得する時に効果的な権威と考えていたのかが分かる。またサイイドたちがヨーロッパ人がイスラーム関連の事柄についてどの程度知っていて何を言っているのかもある程度押さえていたことも分かる。同時に、引用されている文献の偏りを見ると、サイイドたちの「手が届く」文献が何だったのかが見えてくる。

イスラームに関わる議論で通常引用されない文献まで引き合いに出した理由は、この時点でのサイイドのメッセージがアラブ・コミュニティを越えて、ムスリム、非ムスリムを含むインドネシア人、華人、その他蘭領東インドの全住人に届ける必要があったからである。英語を含む複数の言語で出版されたことも、イスラームの枠外の権威に自らの主張の根拠を求めたことも、理由はこの点に求められる。

しかし、わざわざ英語で出版した理由は別に考察する必要があると筆者は考えている。蘭領東インドの非アラブ系の「外国人」、たとえば華人に向けて書くのであればインドネシア語でも事足りるのではないだろうか。実際に『Siang Po (商報)』はインドネシア語で出版されていた。この点について筆者の考えはまだまとまっていない。このパンフレットはイルシャードに対抗する形で発行されたものなので、この時期のイルシャード側が自らの主張をどの言語で出版していたのかも精査する必要があるだろう。

現在では、サイイドとイルシャードの間に20世紀前半のような激しい議論が交わされることはなくなっている。しかし、当地におけるアラブ・コミュニティの歴史をどのように理解するかという問題は現在まで尾を引い

ており、筆者の情報提供者となっているサイドたちの中には、イルシャードを肯定的に評価する研究には違和感を持っている者もいる<sup>(49)</sup>。だとすれば、サイド側の指導者が、出版されてから70年近く経ったパンフレットを外国人の歴史研究者に渡した理由も理解できるだろう。

最後に、現在における称号の使用方法について触れておきたい。アラビア語圏を見てみると、エジプトやレバノン（または歴史的シリア）では、「サイド」という語は「,.., さん」「,.., 氏」という意味で使用されている。アラビア語学習者の多くはエジプトやレバノンで使用されているアラビア語を学ぶため、彼らが理解するサイドという語の意味は図らずも1920-30年代におけるイルシャード側の主張に沿ったものである。現在のインドネシアでは書類や名刺に書かれている名前に「サイド」を付けることは一般的ではなく、筆者の元にあるサイドの名刺でもそのほとんどは称号が付いていない。また最近ではサイドの宗教者に対する敬称としては「ハビーブ (Habib, 愛される者)」を使用する傾向にある。一方マレーシアやシンガポール在住のサイドは、名刺でも電話帳の名前でも、名前の最初に「サイド (Syed)」を付けることが多い。東南アジア島嶼部在住アラブ系のほとんどはハドラマウト起源なので文化的背景は同じだが、国によって称号の使用方法が異なっているのは興味深い。この違いがインドネシア側で起こったサイド・イルシャード論争の影響かどうか、それとも独立以前の行政の違いなのかについては別の考察が必要である。

#### 参考文献

- 『岩波イスラーム辞典』, 「アフガーニー」「ゴルトツィーハー」「サアーリビー, アブドゥルマリク」「シャキープ・アルスラーン」「スヌック・フルフローニェ」「リダー」
- 山口元樹, 『インドネシアのイスラーム改革主義運動——アラブ人コミュニティの教育活動と社会統合』, 東京: 慶應義塾大学出版会, 2018年。
- Boxberger, Linda. *On the Edge of Empire: Hadhramawt, Emigration, and the*

(49) 実際、私の情報提供者の一人はある研究について、『真実の説明』と同じ口調で批判していた。

- Indian Ocean, 1880s–1930s*. Albany, NY: State University of New York Press, 2002.
- Encyclopaedia of Islam*, Second Edition (EI 2). “Ibn Hadjar al-Haytami,” “Kafa’a,” “al-Ramli,” “al-Tha’alibi.”
- Freitag, Ulrike. *Indian Ocean Migrants and State Formation in Hadhramaut: Reforming the Homeland*. Leiden: Brill, 2003.
- Hirsch, Leo. “A Journey in Hadramaut.” *The Geographical Journal*, Vol. 3, No. 3 (Mar., 1894), pp. 196–205.
- Ho, Engseng. *The Graves of Tarim: Genealogy and Mobility across the Indian Ocean*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2006.
- Lujnatoen Nashir Watta’lief of Arrabitatoel ’Alaiyah. *Haqa’iq or a True Explanation: Distributed to the Public for a Record in History*. Batavia: n.p. [1931].
- Mobini-Kesheh, Natalie. *The Hadrami Awakening: Community and Identity in the Netherlands East Indies, 1900–1942*. Ithaca: Southeast Asia Program Publications, Southeast Asia Program, Cornell University, 1999.
- Snouck Hurgronje, C. *Mekka in the Latter Part of the 19th Century: Daily Life, Customs and Learning. The Moslems of the East-Indian Archipelago*. Translated by J.H. Monahan with an introduction by Jan Just Witkam. Leiden: Brill, 2007.